

家庭菜園のような農業を 2014年1月

なんち屋で栽培管理している柑橘園はいくつかの箇所に分かれていて、そのうちひとつの温州みかん園地と育成中の苗木園地で化学農薬を使用しました。石狩修期間を含めて農業に直接携わるようになって5年目にして、初めてのことです。

散布した後は鼻奥がムズムズ、味覚もおかしくなった感じで、夜は寝つきが悪くなる。みかん山から戻った僕を出迎える子どもたちには、シャワーを浴びて着替えるまでは近づかないよう張りし、母乳育児中の連れ合いにも気を遣い、矛盾めいた思いです。

とはいえ昨年9月頃から、愛媛の柑橘栽培地域に飛来した大量のカメムシによって、JAS有機規定の許容農薬の使用にとどめたほかの園地では、ほぼ全滅だったところもあります。用量への影響が小さかったのは、先の温州みかん園地だけ。いまは「これも糸馬食」と開き直しますが、収穫のときや、食べたという人から問い合わせがあったときには、気が重く、生産物が無くなるのは、生産者という立場も失うようで、立つ津ないものでした。

実のところ、自分たちがなぜ有機栽培的な方法に取り組もうとしているのか、明確な理由はありません。ただ僕たちには、自分たちの農業をまっくろくとして捉えようというところがあります。その窮極的なところは、柑橘

の新しい食文化が生まれてくることかな。なんて想像します。この地域文化を丸ごと食べることで、とも言えるのかもしれません。

地産地消とはよく使われるコトバですが、地域文化としての「食」というのは、「地産」「地消」のどちらが先とも言えないものだったのではないのでしょうか。元はどなか別の場所の調理法であったとしても、地元でやる食材や誰かが持ち帰った苗や種を身の回りで栽培して利用し、育まれたものでしょう。現代の地域には市民的なつながりがあって、文化もみんなで育おものだと思いたいが、生産者として、そこには一役果たしたいもの。連れ合いも定番のマーメイドやピールだけでなく、最近では南アジア風アチャール作りにも取り組んでいて、私もよく感じます。

こう考えて、自分たちの農業を、家庭菜園のようなところへ近づけていきたいと思うのです。新しい地域文化を生み出す身近な食材の生産とは、こういう身近な味のあるもののような気がして、それが結局、僕たちにとって有機栽培的な方法と重なるのだと思います。これはプロ意識を捨てるということではなく、農産品の製品性、商品性を見直すということ。重要なのは「十分」な生産量。あとは引き算で、何が大切なのかをはっきりしていく。長い目でみた考えですが、今年から取り組んだ不施肥(無肥料)もひとつの実践です。

正直、これまで農薬ときちんと向き合ったこ

とがありませんでした。先輩のアドバイスも鵜呑みするが、拒否してきただけ。こんな大被害があったからこそ、いまになって、栽培期間中に散布したもので、今後使用の可能性がある農薬についても、じっくり調べてみます。きちんと勉強することで、薬品の選定から、系内導のいく使用方法や判断基準も、規制的に確立していきたいと思っています。

規制白く、としたのは、特に化学農薬が殺菌殺虫のために毒性を發揮するからにはまかなりません。自分たちの健康のためにも、環境全体の保全のためにも、なるべく使わない方がよいに決まっています。それに頼らざるを得ないのはなぜか。カメムシの大襲来だって、根本的には人災に違いありません。この現象ともしっかり向き合う決意を致す、節目の5年目となりました。(うんはら ゆうき)



〒797-0113

愛媛県西予市明浜町狩浜 3-1404

電話: 0894-89-5050 (FAX 兼用)

web: <http://doratomo.jp/~nancha/>

e-mail: nancha@sheep.dog.cx